

遠藤三郎将軍：略年譜(1893年～1984年)

- 1893 (明治 26) 年 1 月 2 日、山形県東置賜郡に生まれる。
- 1804 (同 37) 年 11 歳 8 月 1 日、「日記」を書き始める。
- 1907 (同 40) 年 14 歳 9 月、仙台陸軍幼年学校入学。
- 1910 (同 43) 年 17 歳 9 月、中央幼年学校に移る。
- 1912 (同 45) 年 19 歳 5 月、同校卒業 (恩賜) 12 月、陸軍士官学校入学。
- 1914 (大正 3) 年 21 歳 5 月、陸軍士官学校卒 (恩賜) 重砲兵第一連隊付、12 月砲兵少尉。
- 1919 (同 8) 年 26 歳 8 月、陸軍大学校入学 (3 年間)
- 1923 (同 12) 年 30 歳 3 月、野重砲第一連隊中隊長。9 月、関東大震災の戒厳令下で、
朝鮮人約 6000 人を保護。
- 1924 (同 13) 年 31 歳 8 月、参謀本部作戦課に配属。
- 1925 (同 14) 年 32 歳 9 月、作戦計画上奏。
- 1926 (同 15) 年 33 歳 9 月、フランス駐在武官として仏国に出発。パリからルーアンに移る。
- 1927 (昭和 2) 年 34 歳 6 月メッツ防空学校 (半年間) フランス陸軍大学校 (約 2 年間)
- 1929 (昭和 4) 年 36 歳 12 月、アメリカ経由で帰国、参謀本部作戦課配属。
- 1931 (同 6) 年 38 歳 9 月、満洲事変勃発。橋本ミッションの一員として満洲に渡る。
「満洲事変中渡満日誌」を記述。
- 1932 (同 7) 年 39 歳 1 月、第一次上海事変勃発。7 了口上陸作戦案を起案。
上海に派遣される。8 月、関東軍作戦主任参謀。奉天に派遣される。
- 1933 (同 8) 年 40 歳 2 月、熱河省進攻作戦を立案。5 月タンクー停戦協定締結に
随員として参加。8 月、砲兵中佐。9 月～ソ満国境地帯の地下要塞の築城を指導。
ハルビンの第 731 部隊 (細菌戦実験) の運営にも協力。
- 1934 (同 9) 年 41 歳 8 月、陸軍大学校教官、対ソ侵攻作戦などを極秘で講義。
- 1936 (同 11) 年 43 歳 2 月、2・26 事件、反乱軍の説得に当たる。
8 月野戦重砲兵第 5 連隊長 (九州小倉)
- 1937 (同 12) 年 44 歳 7 月、盧溝橋事変発生。8 月北支に派遣。
12 月、参謀本部第一課長 (教育) 兼陸軍大学教官。
- 1939 (同 14) 年 46 歳 8 月陸軍少将、9 月関東軍参謀副長、ノモンハン事変処理のため、
現地派遣される。ノモンハン停戦指導。対ソ戦の無謀を力説。その結果、孤立。
- 1940 (同 15) 年 47 歳、3 月対ソ恐怖症の烙印を押されて帰国。浜松飛行学校付。
8 月第三飛行団長 (漢口へ)
- 1941 (同 16) 年 48 歳、春から重慶爆撃を指導。その無謀を上司に建言する。
11 月ハノイに移動。12 月マレー半島上陸作戦発動。第三飛行団を指揮し従軍。
- 1942 (同 17) 年 49 歳、2 月第三飛行団長としてシンガポール作戦を援護、
3 月パレンバン奇襲、ジャワ攻略作戦を指揮し戦果をあげる。

- 4月、陸軍航空士官学校幹事、12月、同校長、中将。
- 1943（同18）年50歳、陸軍航空本部、航空総監部の総務部長。
11月航空兵器総局長官（兼務大本営幕僚）。
- 1944（同19）年51歳、サイパン島決戦に前後し、対米航空戦略を大本営に建言。
戦闘機中心のゲリラ戦法を力説。
- 1945（同20）年52歳、4月沖縄決戦を天王山とし、本土決戦を不可とする意見を鈴木首相に建言。
採用されず。敵は大本営にあり、とみる。8月15日、敗戦。戦後日本の生きる道を模索。武備のない徳の国、新日本の建設を主張する。
- 1946（同21）年53歳、3月、埼玉県入間川町に入植。開墾をはじめめる。
- 1947（同22）年54歳、2月、戦犯容疑で巣鴨拘置所に入る。（1年間）獄中、
英語を学習。読書に専念。
- 1953（同23）年60歳、憲法擁護国民連合発足。同代表委員、世界連邦建設同盟参加。
- 1955（同30）年62歳、戦後初めて、中国を訪問。北京で毛沢東国家主席、周恩来首相と会見。
- 1956（同31）年、63歳、8月元軍人団を率いて訪中。
- 1957（同32）年、64歳、7月第二次元軍人団訪中。
- 1959（同34）年、66歳、参議院選挙に出馬、憲法第9条擁護を旗印に護憲活動を目指すも、落選。
- 1960（同35）年、67歳、日米安全保障条約改定に反対、護憲平和運動に専念。
11月、第4回目の訪中。日中国交回復に尽力。
- 1961（昭和36）年、68歳、8月東京で日中友好元軍人の会を創設。機関誌「8・15」を創刊。
護憲平和の論客となる。「8・15」に毎号、護憲と非武装、日中友好の論陣をはる。
- 1972（同47）年、79歳6月、第5回目の訪中。北京の人民大会堂で周恩来首相と会談。
最後の訪中となる。
- 1974（同49）年、81歳11月自叙伝「日中15年戦争と私」を刊行。自分も指導した戦争を「認罪」
しその思想の変革を陳述する。遠藤はその自伝の扉に「軍備亡国」の四字を揮ごう。
- 1979（同54）年、86歳4月、自宅に押しかけて来た元軍人仲間と論争。元軍人仲間の反共・ソ連
脅威論（自衛隊の軍備戸締論）に対決し、理論で相手を屈伏させる。
- 1984（同59）年、91歳、9月9日、「日記」を終了。11月11日、91歳の生涯を閉じた。